

# 序

一九七七年に慶應義塾大学法学部専任講師に就任以来、三三年の長きにわたり慶應義塾および法学部の学問と教育にご尽力された蔭山宏教授が本年三月末日をもって定年により退職される。

蔭山宏先生は一九六八年、慶應義塾大学経済学部のご卒業である。学部では中村勝己先生の研究会（ゼミ）で経済史を学ばれた。卒業後は一橋大学大学院社会学研究科に進まれ、ヒュームの研究で知られる大野精三郎教授の指導を仰ぐ一方、丸山眞男、村瀬興雄、安藤英治、脇圭平、平井正、多田真鋤などの諸先生の門を叩き、薰陶を受けられた。一九七四年に大学院博士課程を修了し、一橋大学社会学部での三年間にわたる助手を経て、慶應義塾に戻られた。その後、先生は一九八二年に助教、一九八七年に教授へと昇進され、順調な学究生活を送られた。

蔭山先生が研究者としての名声を確立されたのは、博士学位論文ともなった一九八六年出版のご著書『ワイマール文化とファシズム』（みすず書房）によってである。同書が登場するまで、学界から世間一般までのワイマール文化に対する関心は、ナチズムの問題と切り離されがちであったと言ってよい。ワイマール共和国には民主主義的政治があり、世界に開かれた文化的雰囲気があり、文学や美術や映画や音楽の爛熟があった。それをふみにじったのが、ワイマール文化と相容れないナチスである。ナチスは、暴力的で悪辣な様々な手段を用いて、成熟した政治や文化の領域に参加できない、教養の低く未成熟な人々を煽り、ワイマールの黄金時代を終わらせてし

まった。したがってナチスの潰したワイマール文化の可能性を現代に救出しなければならない。一般には、そうした観点からワイマール文化が注目されていたと言つてよい。つまり、ワイマール文化とナチスは水と油の関係にあるかの如くに思われていた。

蔭山先生はもちろんワイマール文化を心から愛してやまない方である。その分野の文献資料の蒐集家としても、つとに知られている。特に国際文化都市ベルリンへのこだわりは並大抵ではない。しかし、先生はワイマール文化についての従来の常識論にはくみさなかつた。ご著書において、ワイマール文化の本質にナチス的なものが伏在していたという、いわば連続性の観点を強く打ち出された。

そこでキイワードとされたのは「保守革命」である。先生は、ワイマール時代の本質的要素として「保守革命」と呼ばれる思潮を重視し、それが、現状からの脱却を待望する「動態性」への志向と、人間存在を新たに基礎づけてくれる「支える力」への憧憬によって特徴づけられると、論じられた。そのような「動態性」や「支える力」のあらわれ方・組み合わせられ方の相違によって、政治における右翼と左翼、文化における表現主義などが登場してくるという図式である。一般的には異質であつたり対照的であつたり無関係であつたりすると考えられてきた諸々を、先生は「保守革命」という概念を駆使することによって結び付けたのである。この「保守革命」論によつて先生は、ワイマール期の政治・文化・社会を総合的に把握し、ワイマール文化とファシズムの関連性を分析するための説得的な視点を、初めて学界に示し得たと言つてよい。

当時、本書は絶大な反響を呼んだ。以後、学界に「保守革命」という術語が定着し、ワイマール時代の論じ方が様変わりしたと言える。これは蔭山先生の記した大きな学問的業績である。

ところで「保守革命」という言葉への着目や定義づけを通して、先生の学風の全体像を窺うことができる。「保守革命」とは、哲学や思想として厳格に内容を規定できるものではない。その一歩前の思潮や気分のような

ものであり、しかし、だからといって無力なものではなく、ナチスに命を吹き込むほど、歴史に多大な影響を及ぼしている。では、思想そのものとしては曖昧な「保守革命」が、なぜ目的も内容もより具体的な思想よりも歴史に機能したのかと言えば、それは「保守革命」的な考え方・感じ方が、第一次世界大戦の経験や一九二〇年代の都市文化の経験、その時代ならではの社会的諸経験を最もよく反映し抱合していたからであろう。

つまり先生の学風の根本は、抽象的な理論にも瑣末な事実にも傾かず、理論と事実とを、人間の社会的経験を通じて常に結び付けようとする姿勢にある。学問は理論研究と実証研究に分岐しがちなものであるが、先生は政治史、社会史、風俗史と理論、哲学、思想とを不可分に、しかもどれを主とも従ともせずにとらえるまなざしを、若き日から一貫して保持されてこられた。理論研究だけでも実証研究だけでも明らかにしえない、觀念と現実とが社会的経験を通じて不断にフィードバックされてゆく仕組みにこそ、思想や歴史を考えるうえでのもっとも大切な領域があるという信念を抱けてきた。

そうしたお考えは、学生時代から経済学、社会学、政治学、歴史学、都市文化論、時間論などを幅広く摂取されてきた、先生の学問的系譜の豊かさゆえであろう。また、先生が学生時代を過ごされた一九六〇年代から七〇年代にかけての日本の、政治と文化と思想とが混沌となった時代状況が、先生の学問的営為に一定の影響を与えたであろうことも想像に難くない。

薩山先生は、時代に先駆けて学際的であられた。先生のご性格を反映してか、研究会からはドイツ政治思想、日本思想、国際政治、社会学、哲学、美学、芸術批評などに活躍する、多彩な人材が輩出している。薩山先生のご退職と同時に本年四月より法学部准教授に就任する片山杜秀氏はそうした逸材の筆頭であり、近代文化史論、音楽史論などの分野で異彩を放っている。

薩山先生は普段は寡黙なお人柄に見える。しかし内面に秘める人生哲学と学問への思いは強く、教授会などの

場においても鋭い発言で議論の方向を決めることがあった。そうした時の先生の一貫した基本は、学問と研究の独立性の確保にあった。

先生のご研究は、一九九〇年代以後の諸論文でますます深められている。それらはいまだご著書にはまとめられていないが、遠からずその日は来るであろう。先生の今後ますますのご活躍をお祈りしてやまない。

藤山宏先生の長年にわたる学部に対するご貢献に感謝するとともに、今後のご健勝を祈念して、本号を謹んで進呈させて頂きたいと思う。

平成二三年一月

法学部長 国分良成